新社長登場

荏原製作所

目線上げ〝世界と勝負〟

細田 修吾 氏

横顔

2000年に買収した荏原グループ傘下の米エリオットに出向したことがあり、海外経験も長い。そこでグローバルビジネスを体感し、共創ということも学んだ。「自前の研究開発、技術開発だけでなく、他社との協業や共創といったオープンイノベーションの取り組みがより重要になっている」といい、エリオットでの経験がさらに生かされそうだ。

略歴

〔ほそだ・しゅうご〕1990年（平成２年）東京大学工学部航空学科卒、93年同社入社、19年エリオットグループホールディングス社取締役、21年執行役、23年１月経営企画・経理財務統括部長兼ＣＦＯ、同年８月荏原（中国）董事長、25年取締役・代表執行役社長・ＣＥＯ兼ＣＯＯ。千葉県出身、58歳。

▼ 4期連続過去最高業績を更新する中での社長就任です。

「好調な業績が続いているが、荏原のポテンシャルとしてはまだまだ伸びしろがあると思っている。新しい領域にもチャレンジしている中での社長就任は非常にやりがいがあると感じている」

▼ 荏原の強みをどうみていますか。

「まずは現在、ビジネスを行っている領域がこれからの社会課題を解決するために求められる事業であること。サステナビリティな社会の実現に向けて水、空気、環境など非常に重要な分野での製品群を扱っており、そういった分野との親和性も高い。エネルギーの分野ではこれまでの石油・オイル・ガスといった業界から水素・アンモニアといった新しい分野に裾野は広がっているが当社ではすでに実績も多数あり、社会貢献できると自負している。そしてその事業の基盤となる技術がしっかりと備わっていることが大きな強みといえる。さらに創業から続く〝熱と誠〟という精神が引き継がれて、真摯に社会課題に取り組む企業であることが挙げられる」

▼ グローバルエクセレントカンパニーを目指すと表明されています。

「ここ数年は順調に事業成長を遂げてきているが、世界の競合をみると規模もオペレーションも収益性ももう一段高いところにいる。今後、より世界で戦い、事業を拡大していくためにはもう少し目線をあげて上を目指していく必要がある。まずは収益性の向上、そしてトップラインは1兆円を通過点にして2兆円を狙う企業にしていく」

▼ 足元の課題は。

「個々の市場ごとに課題はあるが、急速に市場が大きく変化する半導体関連の精密・電子事業については、テクノロジーノードにマッチした製品をいつでも提供できるように先手先手で準備し、生産体制についても先行投資している。直近の事業ポートフォリオでは成長性も収益性も高めていく事業に位置付けており、常に市場をウォッチし、柔軟に対応してビジネスに取り組んでいく」

▼ 水素事業についてはどうですか。

「水素社会がいつ、どのような規模で成長していくかまだ読めないところがあるが、クリーンで安全なエネルギーとして水素は求められると考えている。その水素は液体でも気体でも取り扱いが難しく、当社はノウハウを持つ数少ない企業の1社だ。ケミカルリサイクルのかたちで廃プラから水素をつくるということも行っており、これまでの事業のように使うだけでなく、『つくる』はこぶ『つかう』のサプライチェーンを通して新しい事業のかたちとして育成したい。この事業は当社単独でできるものではなく、千葉・富津市に世界初の実スケール商用製品試験・開発センターを開設し、広く連携を図りながら進めていく計画だ」

（聞き手＝多賀恵子、石井惇子）